# 說教道話

完


和書門
類 六〇九八
號
函 一二
架 一四
冊 三

740
内閣文庫
和書
類
號 六〇九八
冊 三
架 二三
函 一四三

内閣文庫
番號 和 6098
冊數 3 ( 1 )
函號 143 740



Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker x-rite
MSCCPPCC0316
x-rite



国立公文書館
National Archives of Japan

之

明治六年第十月發兌

# 說教道話

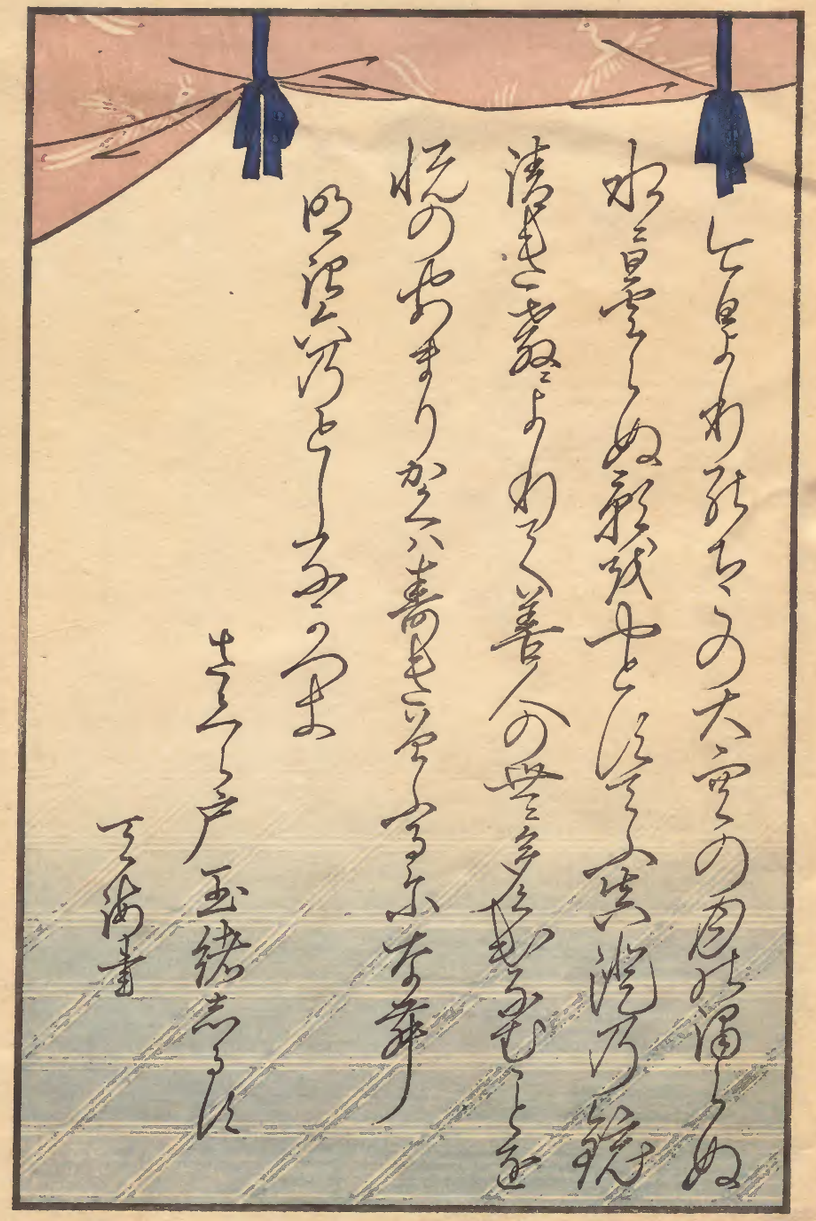
京都　四書房梓

国立公文書館
National Archives of Japan

# 禅書

以はまことに畏こうかたと今も崇奉り
奉りゆく日ごとの御代代の大御恵を
何國ぞ隈もいかもとりひろく宣旨乃
弥乃清宣下はまく幸ひ世毎まふ
世にしあれば我も玉鉾乃道しるべ
書し決なる神の道かりそふ

ゆゆしきことたりの世乃尊きをく
世めてしかはけるかはかりふ世の
恵にもとはまきあれ誰しの人倍け
ゆゆしむ何こそは考へ者ならば
書と聞るまき考へ世ならば我
何ものとはたるるあ一世人ア
尊かれ人又伝ゆゆしきるかれい



一橋図書

# 説教道話初編并次編目録


第一　敬神の實際ハ正直の力行を以て其職を効をふある話

第二　神明數万の群参人の至誠を鑒を感動霊験あるを以て敬神を勸る話

第三　正直の階級を區別して愈己を肅しを敬神尊崇をべき話

第四　貲産ハ天祖の役し給ふ天禄と得意をべき話

第五　正直堅固ふもとが神明の加護益堅固ふる話
第六　神明正直のものを加護し給ふと譬諭を以て話
第七　附不正直の者ハ悪鬼災害を導く話
十万億土を計算して至誠ふ愛國を諭す話
附真正の淨土ハ神國ふると了解する話

説教道話初編并次編目録終

# 説教道話初編

西京　宇喜多練要　著

## 第一　敬神の實際ハ正直の力行を以て其職を効ふる話

抑方今王政復古の際維新日々ふ開化して治國平天下のわゑ三條の御規則を立させら是天下の衆庶をして教導のたゑ神導職を設け諸國ふ説教を行のゝと聽衆雲霞の如く群参を然るふ或人貲産の閑暇をもつて恭詣聽聞致し兼る

御説教心根ハ徹し難有ハ際限なく殊更敬神の説諭を兼て候處我等今日暖なる衣を着し飽まて食し寒熱風雨を凌ぐ家宅ハ居住なるハ皆天神の賜ものなるに恩澤を被らざるものハくそれ而已なるハ我等の魂を即天神より賦與なる處ハして一身の主宰たるものなり依之知覺思慮の分別を辨へ手足の四肢身體の運動をなるも皆ハ是天神の賜ものなるに霊あれハなりとの御示しハ實ハ難有御説教なり今ハ衣

食住の三つハ我等ハ働きの力ハて美き衣服を着ハうがどんざのやうなる穢き衣服を着やうが皆我働の有無ハなると存じ込居りたるハ衣類家宅ハ申もなく我魂なる神様より賜ものと兼ねて尊崇信敬ハ勿論のことなく即今發明致して大切なる神様より賜る魂を悼まむるなと恐入ること支なりとて我家ハ帰ると見るハ児狹い大勢厄介なる計りまて夜を日ハ續きて稼ぎ躁ぐねハ家族を糊口

せるおやが六ヶ敷そまき故妻ゝがをく仕ゝう児
狡ず無理を言ふゝう致ゝまゝれも平常の寵愛
を失ふゝ腹が立つまゝに打擲致ゝたり貴産の
事件ゝはなしても損を仕ゝう欺謀をゝう我駈引
の行屆ざるより貨を設けぞ出のふゝう婢女
ず疎麁ゝて鍋を破るやら丁稚を使ゝ遣れい還
ず遅ひのをゝちを大事の物を途中ゝて落ゝ
たゝう妻ゝう隣家の家婦さひの出やをゝふて羨ま
ゝう貨の融通の手段ゝ心配仕ゝう都てかやう



ゝる事件ゝ魂をいとゝ日を度ゝ朝夕神様を再
拝の柏手の内ゝも産業の事件ゝ氣ゝ移ず背中
ゝ眼ゝゝけをゝも釜の下の焚木ず燃出たる事
まてず氣ゝゝを所詮今日ぐらゝの貧乏人ゝ何
程御説教ゝ一切の物ゝ皆神ゝの賜ものと聴
聞致ゝまゝても稼ゝれゝ今日ず度ゝを次稼げ
ば草即て氣不性とゝう神ゝを再拝ず古そで
ゝおひ寐て仕舞ひ果てゝ御説教ゝ疑惑ゝ發り
まゝて敬神とて真實ゝら神様を信敬致ゝ氣ゝ

ありませ岩併御說教聽聞の間ゝ又も存じもよらぬ貨殖けの註文を聞き時も真實敬神の心ゝありまして是ゞ神さまの御加護じゃ功德じゃと存じ込みをきまゝ欲しひゝ惜しひゝ憎しひゝ可愛ゝ腹の立ちたい諷張忘きて仕舞ま次何卒貨產の事件ゝ拘りても敬神を忘失ぬやうゝ御說得の御講究を希ひ奉りまゝ說師の曰く成程其許の了簡ゝてい敬神といふ義を唯心ゝ尊信を思ひて再拜頓首をしたまと



聞得らるゝ其通ゝれども それゞゝてい其許ゝ說教聽下手と申しのゝして是を上手ゝ聞得る人ゝ敬神ゝ身體ゝて敬神を行ふ去と得意ゝるゝ心ゝ思慮をるゝ故身體ゝ行とれると雖も思ひ通徹しゝ貨產ゝ拘るゝの成し難きのゝ去れゝ依て身體ゝて敬神を行ふ時々何時ゝても敬神を思ゝるゝのゝして假令婢女ゝ疎麁しても狹児ゝ無理をゝても神を敬ふゝを思ゝるゝの也譬へゞ兩替爲替

座の門口ハ行き多くの貨を見て欲ひものしゃと思ひ結ても誰も盗賊と名つけぎさりおぐら手を出して當百一枚ハ盗めバ忽ち盗賊の名ハ遁れ難斯の如く身體ハて敬神を行のへバ日々夜々の所作ハ敬神とおゆ貴産の稼ぎと共も直さ況敬神の誠ぎ顕れるあり依て独児の無理も婢女の疎麁も心ハ分別ぎ法きて敬神の思ひを忘失ざるあるされバ今天祖の至誠の儀を以て其許の問を講窮せむ



夫天神ハ天地開闢して萬物を創造し天祖の天照大御神萬物生成蕃殖して萬民撫育成し給ふ是皆天祖の御恩澤ハ非ざるハ又天祖より以降方今の萬庶といへども即往古の群神の胤裔ハしてその本源皆天神より出てたるあり又我等の祖先より我輩ハ至るまでの血系ハ皆此御國の地味を喰ひ連綿として相續したるハ全く天祖の賜ものの地味を喰ふ故ハ是至大至廣の恩澤ハ非ずや又我等も往古の群神の胤裔ハ

と發明をれば我遠祖の建國補佐のたゞ苦情の勲功を思ふ方今天皇萬民撫育のたゞ宸襟と惱ませ給ふ御意を體認し奉り我輩の遠祖群神の苦情を徹ふく方今治國平天下の御手傳と思慮し面々正直を宗致し己々の家族を治むべし家族を治むる本原より農商工とも業体を勉勵するを限るべし業体勉勵といへども我身の為ふ業体を營むと存じ込み治國平天下の御手傳とハ思ふべ依て天祖の御德輝き貴賤長



短ふ拘らず平等の御恩德を被むる御德厚の九牛の一を真似し奉ると思慮し我々それ〳〵の業体を人のたゞ國土の為ふ營むちやと得意して商人ハ融通を計り此所ふおき物を彼所より取寄せ彼所ふ多きものを薄き所ふて捌き方をなけ買場賣場を得意且那とおれを心得永く賣人買人の離まざるやう實意を盡し薄利を取り人の為方ふおろやうふく勉強をべし又職工ハ深切を以て細工を勵を新工風を凝し永世國産

の洪利ゐ注意して徳を行ふことを専勢と心得
べし農ハ星を頂戴して耕し蚊遺火の薫ゐ食を喰
ふの古語ゐ順して荒蕪不毛の地を開拓し瘠田
を膏腴し精勉して作徳國益を計る可し斯の如
く身體を以て徳を行ふを敬神の誠を顕すと言
ふものゐして神明の御意の正直を行ふといふ
ことなり依て神明の御意と衆庶の心とハ少し
の違ひゐて産業を我ゐ為ゐ成すゐ人の為國土
の為ゐ成すゐの違ひゐ大騒ゐ違ひと成行くものゐ



と我ゐ為ゐ成す業体と心得へき漸々と不淨ゐ
る欲心増長して人道の心を失ひ終ゐハ欲の為
ゐ人倫の道ゐ遠く隔り禽獸ゐ等しく行ひとゐ
と愚痴心よりやくらゐ腹を立て後悔仕て
り物の分別思慮ゐ疎くゐと欲の為ゐ行くさた
真黒暗ゐく世事の大ゐる災厄危難ゐ羅と大ゐ
る損失して立身出世と妨るものゐと假令強情
を以て我慢ゐ貨と貪り集るとも其心不淨ゐし
てハ幽冥の神必ず罰し給ふべし然るゐ人の為國

土の為め産業を営むものハ自然と神明の御加護ふよりハ其心正直ふおりく物の成と成らざるを明確として雑別し無益の事件ハ時日を度らず世事の危難災厄を祓ひ除ぞ産業繁栄して家運吉祥ちらむされる斯の如く得意せバ其心清淨ふしていつも神明の御意ふ相似る故ふ何時ふても神様を信敬し尊崇再拝の行おハるハ ちまハ粛て敬神を身體わく信行するを肝要と知る可し

## 第二

神明數万の群参人の至誠を鑒を感動霊験あるを以て敬神を勸む る話

小理窟言ふ癖のある男進を出て曰く私ハ何角ふはけくも神さまふ縋り奉り鼻ふ腹ふ痛み高責繁昌貨殖ハ狭児の無難ふ生長運命長久懸先無滞寄りそゆうふ迫神さまふ御苦労を掛まそゞ都て私ふ限ら次神前へ参詣致しまそると人々ハ當病平愈家内安全道中無難船中安

恭大願成就何歳の女安産の御願ひ等の祈願を
御請かさとる神さまの御一方さまにて大勢ゞ
一時に轉々に言上し奉るさてく御聞取に御開
き敷ちとおれども人の聞て宜しきに空に大音
聲て言上致しまゝ故に御聞取も宜ちふさま
まそゞ内證の事件に何やら口の内にぶつく
と丹誠を凝して言上致し又遠方の者に遠く隔
て裏の隅から祈願を掛ける殊に神前へ参詣
仕ふう願事を言上せば心中所願満足抔と祈
願するものも御座りまゝるゞ神さまに其至誠を
御鑒被遊し感動して霊験あらたに例證枚挙
して數ふ可うう次然るに前段に申さが如く大
勢群参して一時に祈願し殊更口の内にて言上
し遠方うち立願する輩を神の威神力とい申お
うう一々に鑒て如何して知ろし召そあるやや
と不思議に存しまゝ故得と合點のゆくやうに
御説得おされ被下い弥敬神も至誠に再拜し信
心も増長致しまゝと存しまゝこの儀御示教に

預り度わうひまゝ
説師の曰くこれも以て
あらわ此儀い確然と
斗りふてい其許もかうく兼知いせ
依て今誠義を以て談話をべ〳〵先よく思ふて視
らもよ神ゝ〇い何も醫者いおされど貨貸い猶
更おされど其外失物の占いおさもゝ次然りおら
ち天理お可ひし車件を祈願それが其至誠を御
鑒ゝおされ感應靈験ゝり天理と謂ふい親の為



お子孝心を以て祈願し主の為お家僕義を凝し
て祈願し婦夫の為お貞心以て祈願するの類ひ
あゝ然ゝふ是等の輩日々祈願するこの數多お
きゝる可し其許の謂いゝ如く大音て祈願の
その口の内おく願ふこの遠方ゝ立願するを
の等ゝ如何程群参して祈願するも神〇い
一々お照鑒ゝ是如何とあゝい人い萬物
の靈あゝと謂ふく其魂い天神ゝ賦與する處
あれゝ天神ゝ我魂い預りたるこのおして取

も直さず我魂が神さま也然きに我等生まるる
時に我魂に神ゐまどもそれより生長に隨ひ眼
に諸の色を見てに不淨の愛欲を發し耳に我好
むこゑを聞さぐり鼻に色々の香を嗅て薫をよ
ろこを慕ひ舌に物の味を味ひてに美味を好み
身に暑寒堅柔痛癢を觸る等にて我魂の神を穢
さといへども甚敷に至らざるべうら段々漸
々に不淨の欲心隆盛に隨ひ我魂の神に穢れて
隱ぎさせ給ふて後にに真黒とあり給ふ然るに



世事の災厄に羅ひて迫も人力に及ひがたき時
真實後悔して冥助を祈り又神明を欺うず天理
ふかの儀を祈願を込る時神を無上至尊の思
ひを成し至誠信敬し奉りく立願をる故我魂の
神穢きて真黒あるも忽ち清淨と澄みる也
譬へに大空の月照輝くとも糞水濁水に
に鮮うに蔭を宿さず濁水といへども澄めば月
鮮うに蔭を宿さず如くされば大空の月下らを
して池中に蔭を宿し又水昇らをして池中に大

空の月を宿す大空の月を離れて池中の月おく池中の月を離れく大空の月おゝ斯の如く大空の月ハ天神の如く池中の月ハ我等の魂の神の如く彼之何程群参の人々ありても又ハ遠方より一点願の人と雖も神ゝを照鑒して知らしめを謂ふハ此義理ふて天月池月感應ふる故幾千万人ふても至誠ふ敬神せバ照鑒空しからぬなら有難や尊崇をべきこゝあらぬや恐れ粛て欺く可ふらず

一橋文庫

紀元二千五百三十三年
官許
明治六年第十月刻成
說教道話
全壱冊既刻
貳編三編追刻出版

開版
京都寺町通三条上ル　福井孝助
同丸太町通川端東　松井榮助

書林
同　寺町通四条上ル　田中治兵衛
同　三条通寺町東　福井源次郎

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan